



含む 34 名が参加した。また、マスコミにも取り上げられ地元では大きく報道された。

翌日はダムサイト左岸の女神像の前で献花が行われ、全員が黙祷を捧げ 105 名の工事犠牲者に対する追悼式が実施された。全員の協力によって「榎の木」を記念に植えて記念撮影を行った。最後に全員がダム天端に移動して「菊の花」をダム湖に投げ入れ故人となられた先輩の冥福を祈った。45 年の風雪に耐えたダムは表面が黒ずみ年月の経過は争えぬが、精魂を傾けて打ち込んだコンクリートには漏水もクラックもなく健全そのものであった。湖面には折しも満開の桜の花びらが降り注ぎ、美しいアーチは、昔日のままであった。

みんな去りがたい気持ちであったが再会を誓って「ひえつき節」の里を後にした。

上椎葉発電所の諸元

ダム	
ダム形式	アーチダム
堤高	110 m
堤頂長	341 m
堤体積	390 386 m ³
流域面積	211 km ²
貯水容量	91 550 000 m ³
発電所	
最大出力	90 000 Kw
使用水量	73 m ³ /sec
有効落差	144 m
着工	昭和 27 年 9 月
竣工	昭和 30 年 10 月
工事費	145 億円
工事犠牲者	115 名

ダム要領九州編 1970 年判

(元九州電力(株), 松本建設(株)(宮崎) 新原芳幸)

第 1 回構造物の破壊過程解明に基づく地震防災性向上に関するシンポジウム開催報告

2000 年 3 月 27 日(月), 28 日(火)の両日,(社)土木学会技術推進機構の主催により標記シンポジウムが東京国際フォーラムにおいて開催された。

本シンポジウムは、科学技術振興調整費による総合研究「構造物の破壊過程解明に基づく生活基盤の地震防災性向上に関する研究」のプロジェクトの成果の公表と、関連する調査研究、情報や意見の交換を目的として開催されたものである。

表-1

分野	受託研究機関	一般公募
既存構造物の耐震性調査法	2	3
大規模破壊実験のための振動台加振手法および計測・処理技術	6	4
鋼構造物の塑性域の挙動と終局強度	4	6
コンクリート構造物の塑性域の挙動と終局強度	7	9
液状化および側方流動に対する構造物の挙動	4	9

コンクリート標準示方書(施工編) 四国地区講習会を開催

四国支部では、四国コンクリート研究会と共催で、平成 11 年版コンクリート標準示方書[施工編]講習会を開催した。

講習会は 2000 年 3 月 29 日～4 月 25 日にかけて、四国四県それぞれの会場でを行い、合計で約 370 名の参加者があった。特に、高知会場では、土木学会会長で示方書改訂委員会委員長でもある岡村甫教授(高知工科大学)が、改訂の背景や課題、将来展望について自ら説明されたこともあり、会場定員をはるかに超える 200 名近い参加者があった。

シンポジウムでは、本研究プロジェクトの受託研究機関および類する分野の研究に取り組む方々からも研究成果の発表が行われた。研究分野ごとの発表件数は、表-1のとおりである。

今回のシンポジウムの詳細なプログラムおよび「構造物の破壊過程解明に基づく生活基盤の地震防災性向上に関する研究」に関する内容については下記ホームページを参照されたい。

<http://www.jsce.or.jp/committee/index.html>

(土木学会技術推進機構 / 鹿島建設(株) 高橋裕治)

参加者は幅広く、第 1 部「設計作業と施工管理の要点」では発注者や建設コンサルタントの方々、第 2 部「施工計画と施工作業上の要点」では建設会社や専門工事業の方々、第 3 部「コンクリート製造上の要点」ではコンクリートの製造業および材料メーカーの方々やコンクリート製品のメーカーの方々が、特に熱心に聴講した。

また、参加者からは、地元のコンクリート構造物を例に取った耐久性評価方法や、性能照査型へ移行した際の発注者側としての今後の取り扱い方などに関する多数の質問が出され、講師の方々はわかりやすく丁寧に説明された。

(高知工業高等専門学校 横井克則)